り、洗い桶の湯を頭じゅうにひっかけたり、髪の毛をめちゃめちゃにかきみだしてやったりなど、いろいろのわるさをするのがつねでした。

が、父はすこしもおこらず、わたしのなすがままにまかせていました。

ときに、わたしが、父の手から逃げだそうとしたりすると、かれは、

「こいつめ！」

と、やさしくいって、わたしのからだをとらえて抱きあげ、ぎゅっとだきすくめるのです。そのとき、わたしの小さな臀のうえをおさえつける、父のおおきな手の触感を感じると、わたしは、息もとまるような快感を覚えました。

わしはしばらくじっとして、父にだかれたまま、快感をたのしんでいるのですが、やがて、またあばれだし、父の手から解放されると、こんどは、その仕返しのように、父の巨大な臀部を力のかぎり、ぴしゃぴしゃと打ってやるのです。

すると、父は、

「坊主、もっと打ってくれ。いい気もちだゾ」

いつも、そんなことをいって、わたしをからかいます。

わたしはまた、それがシャクにさわってたまらず、ボクシングの手つきかなにかで、父の臀にむかって、ストレートやらアッパー・カットと、めちゃめちゃに、打ったり突いたりしたすえ、疲れきってやめるのがおちでした。

混血児麻里

わたしは、父も好きだし、母にはまた、恋どころにも似たような感情を覚えていました。

さらに深くいえば、父にたいしては、マゾ的よりもむしろサド的な愛情をつよく感じ、母にたいしては、ただマゾ的のみの恋情だったようです。

そしてそれは、臀を中心にして発達していったように思います。わたしの後年の異常な性的嗜好を考えるとき、これは、けっして、いいすぎではありません。

このように、わたしの愛情は、時計の振り子のように、父と母との間を往復しました。そして、この振り子は、いまにいたるまで、男性と女性とのあいだを往復しているのですが……。

さて、母のスパンクをうけることの望みがなくなったわたしは、それからは母のかわりにそれをしてくれるような者はいまいかと、子供ごころにも、自分の周囲の女をあれこれと考えてみました。それほどに早熟だったのです。

なるべくは、母のように、ずっと年長の美しい女性が希望でした。わたしは、看護婦のだれかれや、女中のだれかれを考えてみました。

が、そのうちには、わたしをかわいがってくれる者はいましたが、わたしの妙な願いをきいてくれるような者は、ひとりも思い当たりませんでした。

そして、そのほかのどんな女性にも、やはり、いないように思えました。

わたしは、このことをすっかりあきらめてしまいました。

それから五年ほどすぎて、わたしは十一歳、小学校四年生になっていました。

その年の八月はじめのこと、母のすぐの姉、つまりわたしには伯母に当たる人が、十二歳の長女を連れて、その子を夏休みじゅう、わたしの家ですごさせるべく、東京から尋ねてきました。

子供同士のこととて、わたしとそのいとこの少女とは、その日のうちにすぐ仲よくなりました。

麻里というのが、その少女の名でした。父親がフランス人の画家とかで、麻里は、目の色の青い、鼻の抜けるように白い、それこそ、フランス人形そのままのような、愛くるしい顔をしていました。

「わたしの名はね、パパがマリー・ローランサンの絵を好きだものだから、その名をとってつけたのよ」

麻里は、そんなことを、わたしに説明しました。

わたしが、マリー・ローなんとかってなんだときくと、

「まあ、知らないの・フランスの有名な女のエカキよ。おぼえときなさい」

一つしか年長ではないのに、もうすっかり姉さん気どりの彼女でした。

麻里が利発な子だということは、わたしにもすぐわかりました。

わたしは、自分のいなかくさい鈍な態度や、いなかことばを、きまりわるく感じました。

麻里の母親は、一晩泊まって、あくる日の夕方、東京へ帰っていきました。

少女のスパンク

わたしは毎日、麻里とつるみあって遊びました。近所の遊び友だちが、麻里の青い目におそれをなして、来なくなったのが、むしろさいわいでした。

麻里は、人並み以上に発達した胸乳や、円熟したおしりをみせびらかすかのように、いつも、キッチリとしたワンピースをきていました。

肉体的に早熟であるばかりでなく、性格的にもひどく早熟であるらしいことが、おなじく性的に早熟なわたしには、すぐ気がつきました。

数日ほどたったある日の午後のこと。わたしは、母親に「植物の採集にいく」といって、ドーランを肩に、麻里とともに、病院の裏手一キロほどのところの小さな山に登りました。

山上の木かげに、わたしたちは腰をおろしました。

日盛りのさなかのこととて、あたりには、人影ひとつみえませんでした。

「ピカちゃん……」

と、麻里がわたしを呼びました。

光一というわたしの名を、ピカソ——それもフランスの高名な画家だと、麻里は説明しながら——にもじって、彼女がそう呼ぶようになったのです。

「あなたを描いてあげるから、はだかになりなさい」

そう命令するようにいいながら、麻里は、わたしのドーランのなかから、自分のスケッチ・ブックをとりだしました。

「はだかか……」

わたしは、鈍ったらしく、おうむがえしにいいながら、それでも、うれしいままに、いそいそと、ランニング・シャツをとり、半ズボンをぬぎました。

「パンツもとるのよ。そんなものつけてたンじゃ、絵にならないじゃないの」

麻里の語気は、ますます命令的です。

わたしは、彼女にうしろをみせながら、パンツをぬぎすてました。

麻里は、わたしのからだが興奮しているのを、見て見ぬようなふりをしながら、わたしにポーズをつけると、紙の上にエンピツをはしらせはじめました。

前向き、うしろむき、よこむき、そのほかいろいろなポーズを、麻里は、わたしに命じました。